

J・ハーバーマスの相互行為論の 展開に向けて

栗原 孝

はじめに

マルクスの社会理論の深い洞察は、今日増々注目されてきている。しかし、この評価は、社会の歴史的变化の中で、公式化したマルキシズムとマルクスの相違を明確にし、捉われたマルクス像を変えることも切離せない。その中で、マルクスを社会学的に読む作業は、彼の理論の批判性の喪失と一般理論への解消の誹りをうけ、ままこの非難が妥当なことが多い。だが、こうした試みが必要なものであるのも否定できない。

ハーバーマスの相互行為論は、この微妙な試みの一つである。それは、E・ハーンがいうように、有餘程の批判に晒されている⁽¹⁾。観念論、折衷論、階級論の不在、経済から倫理への焦点の移行、理論の歴史性と一般性の混同、闘争の治療による置換え、社会理論から解釈学への退行など枚挙に暇がない。とくに、相互行為と並置させられたマルクスの労働概念の歪少化、それに基づくマルクス批判が、自らの作り出したその虚像との対決にすぎないとの反批判は、ハーバーマスの試みの微妙さと弱点の所在を、示唆するといえよう。

しかし、多くはマルクスの名のもとに行われるこれらの批判によって、相互行為論を葬り去ることができるのだろうか。ハーバーマスが意図するにせよしないにせよ、マルクスとすれ違って述べようとする事柄は、こうした批判では見過ごされてしまうのではないだろうか。本稿は、このような視点から、ハーバーマスが相互行為論にこめた意図と概念の内容を明確にし、その意図を継ぐ展開の方途を、内在的に探るものである⁽²⁾。

1. 二元論の由来

ハーバーマスの相互行為と労働の二元論は、繰返し批判されている。だが、彼には、あえて二元論に立つ必要があった。それは、マルクスとウェーバー問題、すなわち、生産力の発達に伴う合理化の進行への対処にある。合理化の進展は、生産力の発達による生産関係との矛盾の増大、生産関係の変動という公式的マルキシズムの命題を、現実に疑問のものとしているのである⁽³⁾。G・ルカーチやフランクフルト学派の第一世代は、この状況に早くから取り組んでいた⁽⁴⁾。ハーバーマスの相互行為と労働の二元論は、これら先達の抱えた問題と対処の、独自の継承なのである。

1920年代初め、ルカーチは、資本主義の高度の発達と、その社会での形式合理性の浸透を眼前にして、マルクスの商品の物神化論にウェーバーの合理化論を組入れ、物象化論を展開していた。そして、他方、ヘーゲルの同一性哲学を基礎に、労働者階級を歴史の主体として描いた。それは、カウッキーら、第二インターの主流であった機械的で改良主義的なマルクス理解に対する、マルクスの再哲学化であり、実践の新たな提言であった。一方、ホルクハイマーやアドルノは、ルカーチの同一説よりなる階級論に反対しつつも、マルクスの再哲学化に熱心に取り組む、ことに、マルクスの実践論とウェーバーの合理化論を追究していった。

だが、ルカーチとフランクフルト学派は、疎外、物象化について共通の認識をもちながらも、歴史的な社会変動の中で、階級論、実践論、合理化論において、それぞれの立場を変えていった。第一次大戦前後に始まり第二次大戦後定着する、生産力の向上に伴う労働者の社会への統合—ニューディール政策、ナチス国家社会主義体制を象徴とする—と、科学技術の社会文化領域の浸食、および、その結果生じる超体制的問題が誘因となった。経済、社会、文化の諸領域への腐蝕した理性の浸透、つまり、操作・管理技術の発達は、一面では生産力の向上に寄与したが、他面では人々の疎外感、虚無感を醸造し、あるいはこの意識さえもてない陽気なロボットを造り、社会に統合していく。

ルカーチは、30年代の自己批判以来、それまでの階級論が観念的同一説だったと述べ、生産活動、すなわち社会と自然の物質代謝としての労働を実践の核とし、労働者階級の意識変革と生産の管理・増強を、党官僚の指導に委ねる正

統派マルキシズムへの接近を図った。しかし、ホルクハイマーらにとって、ルカーチのこの変化は納得できなかった。というのは、彼らは、この変説が意味する、いわゆる科学的マルキシズムへの従属は、官僚制、物象化を生んだ合理化過程の新たな困難に、対応しきれないと見たからだった。スターリニズム下での生産力の増強、それに向けた官僚制の強化にその困難が現れている。そこにフランクフルト学派は、注目したのだった⁽⁶⁾。この状況のもとでは、フランクフルト学派は、党の指導下での階級闘争に完全には同一化できない。彼らにとって、理性を実現する主体は、特定の階級に限定されない真理を語ろうとする者全てである。実践も、階級闘争や生産活動に還元できない、矛盾を批判的に認識し告発する行為全てである。

フランクフルト学派にとって、マルクスがヘーゲルを転倒させ経済学的に基礎づけた人間解放は、依然、嚮導理念である。だが、生産力の発達は、所有関係の転換とともに、合理化の進行の命題とも結びつく。そして、所有関係の転換は平等をもたらすが、合理化は、当面、支配を生む危険を免れ難い。フランクフルト学派は、このディレンマの解決の手段として、ルカーチと対比できる非同一性の理性を選択し、批判の実践を本旨とした。そしてそれは、西欧文明のラディカルな批判の形をとらざるを得なかったのだった⁽⁶⁾。

2. 第一世代とハーバーマスの断続

確かにフランクフルト学派の第一世代も、マルクスとウェーバーの命題の間を揺れ動いた。しかし、この動揺は、70年代以後の情勢をみると、あながち彼らだけの難点ではない。公害問題を契機とする近代科学・技術の反省、エネルギー危機と危険をおし隠した原子力開発、その国策化、社会主義国の覇権行為、労働者の自主要求など、生産力の発達に伴う技術的問題、体制間摩擦、支配と自由の問題は、一層深刻となった。これらは、従来の整合した理論の枠を突破りその再編を迫る。

ハーバーマスの理論活動は、第一世代が提起した諸論点の、こうした情勢に則した追究である。だがそこには、継承と共に、第一世代との相違も現れている。その中心は、二元論の統一を目指しながら、あえて自らを非同一のファク

ターとして批判的存在に止まる第一世代の立場から、同一性獲得への積極的態度への変化である⁽⁷⁾。この意味は、しかし、慎重に理解されねばならない。彼は、第一世代のように自らを非同一のファクターとするだけでなく、そうした批判的態度や実践を対象化し、概念づけることによって状況の外にも立つ。こうすることで、二元論の統一の可能性を客観化する。これは、あたかもルカーチの同一性と非同一性の同一性の高みにある同一説の如き印象を与える。しかし、ハーバーマスは、この立場に立つことで批判性を失うものではない。第一に、彼は、第一世代の問題関心を受継ぎ、変ることなく批判理論を展開する。第二に、コミュニケーション論と人格論によって、批判的实践とその主体の成立根拠を解明することをつうじて批判の立場を基礎づける。これは、批判としての実践ではないが、批判の理論的解明としての実践である。

こうした継続を、以下、合理化問題についての第一世代とハーバーマスの見解の対比で指摘しておこう。フランクフルト学派のウェーバー批判は、基本的に(1)ウェーバーは、自由主義的資本主義の法制度が隠している、資本一労働の不平等を無視したまま、独占資本主義、社会主義への移行を合理化という抽象概念で考察し、二重の意味で資本主義の階級的内容を隠蔽してしまった。(2)社会主義下の合理化は、真の合理性を導く可能性をもつことをみていない。の二点にあった⁽⁸⁾。ここまではハーバーマスも同意する。だが、ホルクハイマー、アドルノがもつウェーバーとの共通点を、彼は共有しない。

ウェーバーは、合理化論によって、マルクスが当面しなかった後期資本主義に対処しようとしていた。しかし、かつての自由な資本主義に共感を抱きながら、合理化を歴史の運命とする故に、ペシミズムに陥った⁽⁹⁾。他方、ホルクハイマーらも、啓蒙主義批判を行ううちに、同様のペシミズムを滞りていく。彼らは、マルクスをも啓蒙主義の一員とみなすことで、人間と自然の疎外のマルクスによる回復に疑問をもたざるを得なくなった。かといって新たな道をまだ提示できない。彼らは批判者に止まる他ないのである。ハーバーマスは、このペシミズムを共有しない⁽¹⁰⁾。相互行為論は、第一世代が立止った地点からの新たな一歩なのである。

3. 相互行為の内的構成

では、相互行為論に、このような第一世代との断続、展開は、具体的にどうあらわれているのだろうか。結論を先取りしていうと、相互行為論は、批判的実践の社会学的対象化であり、その意味で、内容を第一世代から受継ぐが、展開の様式が異なる。そして、第一世代の合理化をめぐるディレンマを、この相互行為論で解こうとしている。それも、通常理解されている二元論ではなく、言語行為、戦略的行為、労働の三層構造をもつ社会的行為論によってである。相互行為論は、実は、言語行為と労働の緊張と、その統一の場を明示しようとするものなのである。

批判的実践のハーバーマスによる追究は、アリストテレスにおける政治と、フロイトの治療の評価にみられる。すなわち、アリストテレスの政治は倫理と一体で、技術ではなかった⁽¹¹⁾。また、フロイトの治療は、ハーバーマスの相互行為のモデルなのだが、それは、相互了解、相互啓発による、歪曲した人間関係および内的欲求からの解放を意味する⁽¹²⁾。これは、人類の自然からの解放の過程である労働と対置される。政治と治療をこのように抽出したのち、ハーバーマスは、技術と実践の統一を実践の理念により、労働と相互行為の統一を、相互行為における解放的関心により果そうとする。

ハーバーマスは、こうして、実践を相互行為に投影する。そして、その一方で、相互行為を、ウェーバー、G・Hミード、T・パーソンズらの行為論の枠組にひきつけて対象化する⁽¹³⁾。こうした社会学理論の吸収は、第一世代にはなかったものである。他方、彼の社会的行為の総体は、従来の行為論に負け勝ちな労働を補ったものとなっている。それが、周知の、労働と相互行為の規定表にまとめられている⁽¹⁴⁾。ここで相互行為は、社会規範の規則に導かれ、言語をつうじて了解し、意味を共有し、自由な意志表明と相互批判に関わると規定されるのだが、これが、実践と社会学的行為の橋渡しの意義をもつことに注目できよう。

しかし、この試みには、ハーバーマスの相互行為論の意図を、かえって曖昧にする危険も内在している。相互行為と労働が、独自の論理をもち相互に還元できないものだという彼の主張を、両者が全く無関係な領域だと述べていると

誤解し、安易な二元の並置と理解し批判する者は多い。両者の独自の論理と、還元不能性については、後ほど明らかにするとして、ハーバーマスが、両行為の相互行為をこそ論じていることを、まず示そう。そのためには、相互行為と労働の各々の内的構成を押えねばならない。

T・マッカーシーは、それを次のように整理している⁽¹⁵⁾。労働・目的合理的行為は、狭義には、合理的決定、技術的知識の操作上効果的な適用の行為、および行為体系である。その対象は、自然であれ社会であれ客観的なものである。広義の労働・目的合理的行為は、戦略的行為を含んでいる。この行為はゲームの規則で規制され、間主観性のレベルで展開される。この行為は、行為者相互の期待の相補性ではなく、計算された目的達成をめざす故に、目的合理的行為なのである。一方、相互行為は、狭義には言語行為であって、行為者間の相補性、合意を目的とする。また、広義には、戦略的行為が相互行為の一部をなす。間主観的な規則の合意を含むからである。

実は、ハーバーマスは、言語行為を、コミュニケーション論の中でさらに分析、細分している⁽¹⁶⁾。その詳細にここでは立入らないが、ただ、そこで、言語行為に、既存の規範や意味を自明の共有のものとして成立つ、通常、言語を用いた伝達行為と、言語の理性的使用によって、自明とされる規範や意味を自省、批判する過程である論争を区別する点が重要である。論争は、批判的実践の極限を表わすのである。論争と伝達行為を、言語行為の下位概念として、マッカーシーの整理を基礎に、相互行為論の構成をまとめて表示しよう。

表 1

社会的行為	論争	言語行為 = 狭義の相互行為	広義の相互行為
	伝達行為		
	戦略的行為	狭義の労働	広義の労働
	道具的行為		

この表からわかるように、相互行為と労働は、戦略的行為を媒介領域として関係する。この構成を、相互行為論の三層構造と呼ぶことにする。そして、こ

ここにハーバーマスが、合理化の問題を解く鍵がある。

彼は、二つの行為類型に基づいて、社会体系を類別する。目的合理的行為が優勢な社会体系と、相互行為が優勢な社会体系である。そして、この純粋型の両者の混合型である現実の社会体系を表わすために、(1)言語に媒介された相互行為を支配する、規範から成る社会の制度的枠組ないし社会文化的世界と、(2)そこに《うめこまれた》目的合理的行為の下部体系を区別する⁽¹⁷⁾。つまり、ハーバーマスは、合理化過程を、目的合理的行為の下部体系が制度的枠組にうめこまれていく過程として、分析しようとするのである。このうめこまれた部分が、戦略的行為の領域である⁽¹⁸⁾。この領域の拡大を、マルクスは、資本の文明化作用、すなわち経済的な下からの合理化として、ウェーバーは、宗教の世俗化、すなわち価値論的な上からの合理化として、とくに考察した。しかし、既述のように、ウェーバーは、その形式的合理性を実質的合理性によって超える方途を、十分展開できなかった。また、科学的マルキシズムも、これに成功しているとは言い難い。ハーバーマスは、これを、ヘーゲルの新しい解釈に立つマルクス批判によって解こうとする。それが、彼の三つの基本概念の措定と、それらの体系的追究の主張なのである。

4. 人間と自然の緊張を孕んだ統一

ハーバーマスは、ヘーゲルがイェナの精神哲学において言語、家族、労働を、それぞれが、主体と客体の独自の媒介機能をもって精神の発達を構成する媒介項であり、相互関係しつつも相互に還元できない同位同格のものとして位置づけていたとする⁽¹⁹⁾。この主張が、ハーバーマスのマルクス批判の原点である。

ヘーゲルは、カントからフィヒテ、シェリングへと展開されてきた自覚の論理を、精神における自己形成的自覚に集大成した。そしてまた、シェリングの自然現象学を背景に労働の本質を捉え、これを精神の運動と考えた。これに対しマルクスは、ヘーゲルらの歴史的で形成的な自覚に、シェリング、ヘーゲルと続く主観的自然を唯物論的自然へと転倒させたフォイエールバッハを統合し、生活手段の生産としての労働を、人間の類的生活の本質とすることができた。これが、「精神現象学」から初期マルクスへの展開の、通常理解である。マ

ルクーゼも、この文脈での労働を実践の本質と捉えたが、ハーバーマスは、ここに欠落の芽をみる。何故ならばこの理解が、歴史的社會変動の中で、現実には、マルクスの本来の意図を消滅させかねなくなっているからである。

マルクスは、ヘーゲルにおける人倫関係の発達としての人類の世界史的形成過程を、社会生活の再生産の法則から再構成しようとした。それは、飢餓と労苦からの解放をつうじて、隷属と屈従からの解放を実現することであった。しかるに合理化の趨勢は、前者を後者の必要ではあるが十分な条件ではなくした。つまり、資本主義社会での生産力の発達を、所有関係の轉換の潜在力としてよりも、体制維持力として機能しはじめる⁽²⁰⁾。これは、先進資本主義国と第三世界の国々の拮抗関係の中で、一層鮮鋭となっている。また、それに呼応して、社会主義国でも合理化が、支配・管理と化す危険は免れなくなっている。

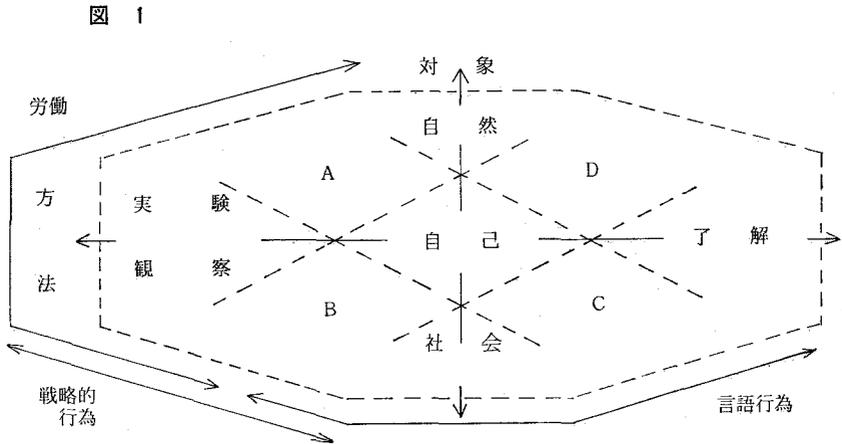
この現状は、労働を実践の本質とする帰結であるし、また、その論理では超えられないものである。つまり、これは、ハーバーマスによれば、ヘーゲルが観念的にはあるが、精神の発達について体系的に構想した人類の自己形成を、労働によって一元的に説明したマルクスの限界でもある。マルクスは、相互行為と労働の連関を一元的に説明しすぎているのである。こう理解する故に、ハーバーマスは、言語、家族相互行為、労働の三概念が表わす媒介過程が、人間の類的生活の本質であるヘーゲルの自己形成の運動を構成するとし、マルクスが労働によって一元的かつ複合的に説明した内容を、この自己形成の運動の名のもとに再構成する。そして、労働を、基本的ではあるが全てを説明するのではない、生産活動の一部として、限定して位置づけるのである。それが、相互行為論の三層構造に示されているのはいうまでもない。

ハーバーマスが、合理化の問題を戦略的行為において捉え、これを三つの基本概念に基づく、社会的行為の体系的行使によって解こうとすることは、今や明らかであろう。それは同時に、人間と自然の疎外の回復の道でもある。だが、彼の力点は、この体系的関係のうち広義の相互行為の問題、つまり、言語行為と戦略的行為の関係におかれている。次にこの事情を明らかにしよう。ここに彼の二元論（独自の論理と還元不能性の主張）が意味をもつのである。

まず留意せねばならないのは、戦略的行為が、マルクスのいうところの、外

的自然に対する働きかけとしての労働と共に存立する、人間の協働様式を表わすことである。つまり、多くの批判に反して、ハーバーマスは、労働の規定（広義のそれ）に対人行為を含めている。協働が、今日、技術的形式的合理性に貫かれていることを指摘するためにこそ、戦略的行為と呼ぶのである。この協働様式の発達、社会の生産力の発達を意味する。だが、繰返し述べてきたように、それは、そのままマルクスのいう人間と自然の宥和をもたらすことにはならない。労働と相互行為の合理性は異なるのである。

彼の二元論を理解するために、認識の対象と方法の二軸からなる分類を、試みに設定してみよう⁽²¹⁾。



図でAは自然科学、Bは経験的社会科学、Cは了解科学、Dは自然との宥和の思想を表わす。また、この図に行為の類型を対応させると、Aは労働、Bは戦略的行為、Cは言語行為に対応する。

ところで、Bの経験的社会科学は、自然科学の方法と論理を基に成長した。一方、Cの了解科学は、しばしば経験科学に回帰してしまったが、デイルタイ、ウェーバーをへて、今日、解釈学・現象学の方法をもつ社会科学において追究されてきている。そこで、ハーバーマスの科学論の論点は、(1) 実際の経験科学、了解科学は、それぞれ双方の混合体であって相互に関係するにして

も、別の論理をもつ。(2) 経験科学の発達に応じて、了解科学が全体として実証主義に陥り、独自の論理を保持できていない⁽²²⁾。(3) その独自の論理を明確にしなくてはならない。(4) 人間社会をこの両科学の緊張を孕んだ総合によって、対象化せねばならない⁽²³⁾、とまとめられよう。これらの中で、二元論の中核を示すのは、第一点である。つまり、両科学は、経験科学が、命題的真理によって成立つのに対し、了解科学は、表現の意図の了解、真意・虚偽の判断によって成立つという、決定的相違をもつのである。そして、ハーバーマスは、まさにこの科学論上の二元論に立脚して、労働と相互行為の合理性の相違を指摘する。目的合理的行為の合理化は、経験分析上真なる知識の蓄積に依存するが、言語行為の合理化は、命題的真理ではなく、意図表現の真意性と規範の正当性に依存する⁽²⁴⁾。換言すれば、労働は、目的追究の手段の合理性を高め、相互行為は、目的そのものの合理性を高める。

両行為の相違を画定したうえでハーバーマスの方針は、もはや明らかであろう。それは、科学論での論点と同じ文脈で考えられる。G・フロイスタットは、三つの基本概念と三つの関心をあわせて、労働一道具的関心、言語一実践的関心、支配一解放的関心と整理しているが⁽²⁵⁾、これは、ハーバーマスの意図をよく表わしている。彼によれば、三つの行為を導く関心は異なる。その中で相互行為とこれを導く解放的関心は、他の二行為と関心の総合の場を示す。だが、今日、戦略的行為は、なお支配関係を内在させているのである。これは、自然への従属と、歪曲したコミュニケーション⁽²⁶⁾の双方によって維持されている。しかも、自然から解放の論理が、コミュニケーションの歪曲に一役買っている。今や、言語行為の合理性とは何かを解明し、戦略的行為を含めた相互行為の合理性が求められねばならない。

人間と自然の宥和の問題についても、同様に理解できよう。この問いは、図1ではDの領域に関わる。だが、自然との直接の了解関係は、原理上限られる。宗教や哲学には、これが直接成立すると考える思考があるが、直接の媒体は、身体感覚のみであろう。しかも、豊かな五感が、自然・社会両科学の発達に基礎となり、また発達の方向を示すとしても、その実現は、翻って、道具や言語の媒介より成立つABCの領域を介して初めて可能なのである。とすれ

ば問題は、むしろ、ABCの媒介を認めただけで、人間社会を対象とするBとCは、相互還元可能か、また、Bの発達そのままCの発達を意味するからである。しかし、これは不可能である。ならば、三つの行為を別のものと分析的に指定し、その緊張を孕んだ総合を、Dに至る道とせねばならない。そのためには、まず、等閑にされている言語行為の合理性を保証し、その合理性によって、労働と言語行為の緊張より成立つ戦略的行為の領域を再編しなくてはならない。これが、ハーバーマスの主張であろう。

5. 相互行為論の射程と展開上の問題

相互行為は、独自の論理をもつ。しかるに、今日の科学・技術の発達は、この独自性を無視し、無力にしようとしている。このような状況に対して必要なのは、相互行為の合理性の理論的解明であり、政治の実践の回復、経験的社会科学の再考、戦略的行為領域の再編である。これが、ハーバーマスの合理化問題解決のプログラムである。個々の社会批判はおくとして、彼がこのプログラムを如何に理論展開しているか最後に示し、その問題を考えよう。

その一つは、三つの基本概念、相互行為論の三層構造を基礎にした、社会分析の枠組の設定である。その大枠は、人類の自己形成を社会進化と捉え、マルクスの社会構成体、史的唯物論を、K・エダールの社会発達論、パーソンズ、C・オッフエ、D・ロックウッドらのシステム論、行為論、J・ピアジェの学習論などによって再構成するものである。詳細を省かざるを得ないが、これは、社会体系を経済、政治、社会文化の三下部体系にわけ、三体系の機能連関を分析するに当り、この体系間に位階秩序をおき、並びに各体系における基体と制度を区別し、その適合関係を社会構成体に現れる組織原理の変化として分析するというものである⁽²⁷⁾。

この分析の際のハーバーマスの特徴は、社会文化体系の発達論にある。彼は、生産力の発達が社会に及ぼす機能を、マルクスが既に基本的に解明しているとしたうえで、しかし、マルクスにおいては、意味・価値・制度よりなる規範構造の変革は、経済的なシステム問題とその解決に依存するに止まっている。また、通常マルキシズムの仮定では、文化が、新しい社会の発達段階へ

の移行にある役割を果すようにみえても、上部構造の現象にすぎないとされると批判する⁽²⁸⁾。これに対しハーバーマスは、次のテーゼを掲げる。すなわち、規範構造の発達は、新しい社会の組織原理が社会統合の新しい形式を意味する故に、社会進化の推進力である。それはまた、可能態としての生産力の具象化、新しい生産力の創造、並びに、社会の複合性の増大を初めて可能にする⁽²⁹⁾。

このように、ハーバーマスは、史的唯物論の文化の相対的自律性の公式以上の機能を、文化に与える。T・シュロイアーは、マルクスの経済批判プラス、ハーバーマスの文化批判こそ目指す方向だとしている⁽³⁰⁾。が、それは、ハーバーマス自身の目標である。しかし、そのために彼は、当面、欠落したレベルの理論構成に、力を注がねばならない。この彼の方針を、アプリアリに否定するのは避けるべきであろう。ここで問題があるとすれば、批判的に吸収するシステム論的一般理論を、歴史的社會分析に如何に適用できるかである。三下部体系の位階秩序・機能連関、特に文化体系のそれが当該社会でどう現れるかは、経験的テーマである。だがハーバーマスは、社会進化を説明するコミュニケーション論の必要を説き、その展開を試みるに急であり、具体的分析をとりあえず果せていない。

相互行為論の展開は、次に、意味空間の拡大とその制度化に当たっての正当性を保証する、コミュニケーション論にみられる。これは、相互行為の合理性を直接追究する。彼は、N・チョムスキーの言語能力論を足がかりに、J・L・オーステン、J・R・サールらの発話行為論を検討し、コミュニケーション能力の概念を設定する。そしてそれを、歪曲したコミュニケーションの中で、これを反省し批判し正す能力の核に置く。論争は、この能力の発現の極限形である。言語の普遍的運用論は、発話行為のレベルまでおいて行われる、ロゴスの理論的解明なのである⁽³¹⁾。また、ここで、このコミュニケーション論が、論争の機能と場の保証を要求する公共性批判⁽³²⁾によって、彼の文化批判、社会発達における理性の実現という関心に結びつけられることも忘れてはならない。発話者相互が、欲求・意図を真意をもって表現し、それを了解する。そして、表現された欲求・意図を批判検討し、そこに潜む虚偽を相互に正し、真実に方向づけ、合意を達成する。この発話規則は一つの倫理であり、同時に、理性的な

規範の制度化の原理なのである⁽³³⁾。

こうした追究が、遅れていた領域での理論形成に先鞭となることは否定できない。個々の問題があるにしても方向は定められている。だが問題は残されている。それは、論争・公共性の理論と現実の乖離をどう架橋するかである。理想的発話局面を、ハーバーマスは、カントの規則的原理に止まるものではなく、かといって、ヘーゲルの存在的概念でもない、生活形式の事前仮象でもある構造的な仮象であるという⁽³⁴⁾。だが、確かにこの仮象は日常の言語行為に前提されているかもしれないが、経験的場面では、ハーバーマスも認めるように、実際に歪められている。この前提は、批判的認識によってのみ自覚できるのである。つまり、それは、批判理論の出発点であっても、批判的認識を引き起すものではない。これが、ハーバーマスは解釈学的悪循環に陥っていると批判される故由である。

しかし、彼は超越論的に措定する理性の実現に無力だ、と判断するのも性急である。A・グールドナーは、ハーバーマスのコミュニケーション論による実践を、従来の階級闘争と対比して評価したうえで、彼が社会主義に共感する点にこそ破綻があるという⁽³⁵⁾。対照的にO・ネフトやG・テルポーンは、ハーバーマスの公共性が、プロレタリアートのそれでないとして批判する⁽³⁶⁾。この両批判は、ハーバーマスの立場を浮彫りにしている。革命を忘れない改革、政治イデオロギーより生活に根ざす異議申し立て、草の根民主主義を理念とするのである⁽³⁷⁾。そして彼の理想的発話局面は、これらの理念をもつ人々の間で萌芽し育まれている。彼の理性の実現は、彼らの運動の可能性に託されるといえるのである。しかし、なお、彼らが限られた存在であるのは否めない。ここに、ハーバーマスは、科学者・専門家の共同体を理想とし、大衆と乖離しているとの批判が妥当する一面がある。

これに対し、ハーバーマスの相互行為論は、もう一つの可能性をもつと考えられる。それが社会化論である。彼は、フロイト、ピアジェ、ミードの各流れをくむ社会化研究を総合し、コミュニケーション能力を中心に、認識能力、道徳能力より成る理性的人格の発達を構想する⁽³⁸⁾。それは、今日限られた存在である実践主体の人格の形成論である。ここで注目すべき点は、ここでもハーバ

ーマスは、人格発達の最終段階に彼の理想的人格を置き、先験的な理論構成を行うのだが、その枠組は、経験的諸研究に開いたもので、多くの要因を吸収する可能性を残していることである。つまり彼は、主体の生成を、文化の伝達としての広義の教育・学習をとおして考察する。教育と学習は、相互行為よりなる社会関係のネットワークへの参加能力を形成する基本メカニズムであり、行為者の意図した機能、意図せぬ機能をはじめ、個人の素質、社会的環境など多くの要因で規定される。その規定関係は経験的なものである。社会化論は、実践主体の発達を現実的に問うものなのである。

ハーバーマスは、こうして、社会の発達論、理性の基礎論、現実の実践主体論、この主体の将来に向けた発達論を、相互行為論の関係領域として展開すると考えられる。これらを社会変動、運動、組織、変革主体などの各論の中で検討すると、彼がやり残している部分は大きい。だが、相互行為の合理性の主張は、そのいずれにも一貫する命題を与えているといえよう。この抽象的命題、すなわち超越論的に措定した理性を、暴力を内在した制度の中で具体化するのは、実践主体の運動と主体形成の諸条件の相互連関である。しかし、彼の理論的考察は、経験的に開いているにかかわらず、まさに、その経験的現実に行きついたところで立ち止まっている。これは、社会化論でも同様である。

(注)

- (1) Dallmayer W, Aufl, *Materialien zu Habermas*'> *Erkenntnis und Interesse*, Suhrkamp 1974. pp.220~243, 城塚登監訳『マルクス主義とフランクフルト学派』青木書房, 1974, 89~113頁。
- (2) 相互行為論を積極的に評価する見解も多い。最近では、書評：山本啓『ハーバーマスの社会科学論』, 毎日新聞1981, 2, 9朝刊が、私の見解とほぼ一致する。
- (3) 生産力と生産関係、土台と上部構造の関係に関する史的唯物論の公式を、労働と相互行為の概念で再構成するのが、ハーバーマスの重要な意図の一つである。しかし、本稿は、相互行為論を行為論として扱い、社会構造の分析の側面には、十分考察を加えていない。なお、注18参照。
- (4) Jay M, *The Dialectical Imagination*, Little Brawn & Company 1973, 荒川幾男訳『弁証法的想像力』みすず書房, 1975, 徳永尙『社会哲学の復権』せりか書房, 1968, 同, 『現代批判の哲学』東京大学出版会, 1979。
- (5) 彼らのディレンマは, Marcuse H, *Soviet Marxism : A Critical Analysis*,

- Columbia University Press, 1958, 片岡啓治訳『ソビエトマルクス主義』サイマル出版会, 1969, によく現れている。
- (6) Horkheimer M & Adorno T. W. *Dialektik der Aufklärung*, Fischer, 1969, 他に両者の伝統理論, 実証主義批判諸論文。
 - (7) 清水多吉氏は, これを, ハーバーマスの批判性喪失と否定的に見るが, 本稿はむしろ, 積極的評価を試みる。『流動』1978年10月号参照。
 - (8) Stamme O Aufl, *Max Weber und die Soziologie heute*, J. C. B. Mohr, 1965, 出口勇蔵監訳『ウェーバーと現代社会学』上下, 木鐸社, 1976, 1980, 所収のマルクーゼ, ハーバーマスの報告, 討論。Habermas J, *Thechnik und Wissenschaft als Ideologie*, Suhrkamp, 1968 A, 長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊國屋書店, 1970, 特に45~103頁, Jay M, 1973, 訳書172~173頁。
 - (9) 寶島朗『ウェーバーと社会主義』有斐閣1980。
 - (10) Habermas J, *Philosophisch-politische Profile*, Suhrkamp, 1971 A, pp. 176~199。
 - (11) Habermas J, *Theorie und Praxis*, Luchterhand, 1963, 細谷貞雄訳『理論と実践』未来社, 1975, 11~72頁。
 - (12) Habermas J, *Erkenntnis und Interesse*, Suhrkamp, 1968 B, 奥山, 八木橋, 渡辺訳『認識と関心』未来社, 1981, 224~288頁。
 - (13) Habermas J, *Zur Logik der Sozialwissenschaften*, Suhrkamp, 1970。
 - (14) Habermas J, 1968 A, 訳書62頁。
 - (15) McCarthy T, *The Critical Theory of Jürgen Habermas*, MIT Press, 1978, pp. 29~30。
 - (16) Habermas J, “Was heisst Universalpragmatik” in Apel K. O. Aufl, *Sprachpragmatik und Philosophie*, Suhrkamp, 1976。
 - (17) Habermas J, 1968 A, 訳書63~63頁。
 - (18) 労働と相互行為による, 生産力と生産関係の再構成も, この三層構造と制度的枠組, 下部体系等の概念との関係で検討せねばならないだろう。また, ここで特に, 戦略的行為の領域が, 現代の物象化した人間関係を表わしていることに注目されたい。なお, 5節参照のこと。
 - (19) Habermas J, 1968 A, 訳書5~44頁。
 - (20) 科学と技術が, 代償イデオロギーとなったとの見解は, マルクーゼ, ハーバーマスの現代社会批判の特徴である。
 - (21) Habermas J, 1968 B, 1970 の二著作で展開する社会科学論を理解するために, 設定したもの。
 - (22) 前注二著作を中心とする, 現代の現象学, 解釈学批判を参照のこと。

- (23) Habermas J, 1968 B での実証主義、解釈学批判と弁証法理論の主張に見られる。
- (24) Habermas J, *Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus*, Suhrkamp, 1976, pp. 33~34.
- (25) Dallmayer W, 1974, pp. 71~106.
- (26) Lorenzer A, *Psychoanalyse als Sozialwissenschaft*, Frankfurt, 1971, を初めとするコミュニケーション論による精神分析研究を、ハーバーマスは、社会関係論として吸収している。
- (27) 詳細は、Habermas J, 1976, Habermas J, *Legitimationsproblem im Spätkapitalismus*, Suhrkamp, 1973 A, 細谷貞雄訳『喚期資本主義における正統性の諸問題』岩波書店, 1979.
- (28) Habermas J, 1976, pp. 11~12.
- (29) *ibid.* 35, 規範構造の発達は、文化・社会制度の変化であると同時に、その中でアイデンティティを維持し成長する個人の意識の変化を意味する。このテーゼは、5節で扱うコミュニケーション論、社会化論と不可分なものである。
- (30) Dallmayer W, 1974, pp. 41~70.
- (31) Habermas J & Luhmann N *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Suhrkamp, 1971 B, pp. 101~141. 井口省吾訳『チヨムスキーと現代哲学』大修館, 1976, 所収。Habermas J, "Wahrheitstheorien" in: *Wirklichkeit und Reflexion: Walter Schulz zum 60 Geburtstag*, Neske, 1973 B, pp. 211~265.
- (32) Habermas J, *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Luchterhand, 1962, 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社, 1973.
- (33) Habermas J, *Kultur und Kritik* Suhrkamp, 1973 C, pp. 213~214.
- (34) Habermas J, 1971 B, 訳書 224~225頁。
- (35) Gouldner A, *The Dialectic of Ideology and Thechnology*, Seabury, 1976, pp. 138~152.
- (36) Therborn G, "Jürgen Habermas: A New Eclecticism" in *New Left Review*, 67. 1971. Negt O & Kluge A, *Öffentlichkeit und Erfahrung*, Frankfurt, 1973.
- (37) Habermas J, 1968 A, 訳書97~100頁。1973 A, 訳書188~231頁。Balaffi A, "An interview with Jürgen Habermas", *Telos*, 39, Spring, 1979.
- (38) Habermas J, 1973 C, pp. 118~194, pp. 195~231, 1976, pp. 63~91, pp. 92~126. Döbert R, Habermas J, Nunner Winkler G Aafl, *Entwicklung des Ichs*, Anton Hain Meisenheim, 1980, pp. 9~30.